

各位

三神地域農業指導者連絡会作物部会
三神農業振興センター

「稲作情報（第7号）」について（送付）
このことについて、下記のとおり送付しますので、業務の参考にして下さい。

稲・大豆作情報（第7号）

1. 情報田生育調査結果について

(1) 耕種概要

品種名	夢しずく (上峰町)	ヒノヒカリ (鳥栖市)	さがびより (みやき町)	ヒヨクモチ (神崎市)
移植日(月日)	6月11日 (平年：6/10)	6月23日 (平年：6/20)	6月19日 (平年：6/21)	6月20日 (平年：6/21)
栽植密度(株/m ²)	15.7 (52.5株/坪)	18.5 (61.6株/坪)	18.8 (62.6株/坪)	16.8 (55.9株/坪)

(2) 調査結果（8月10日現在）

品種名	夢しずく	ヒノヒカリ	さがびより	ヒヨクモチ
草丈(cm)	出穂期 8/10	83.2	81.7	78.9
平年値(平年比)		83.7(99)	79.1(103)	73.7(107)
茎数(本/m ²)	止葉葉位 13.7	352	398	568
平年値(平年比)		479(74)	455(88)	562(101)
葉齢(L)	止葉葉色 32.2	13.1	13.6	13.6
平年値(平年比)		13.3(-0.2)	13.7(-0.1)	13.6(±0)
葉色(SPAD値)		32.5	34.7	36.1
平年値(平年比)		35.6(91)	36.6(95)	37.3(97)

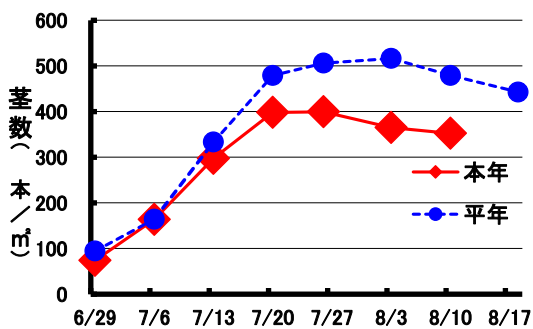


図1. ヒノヒカリ茎数の推移

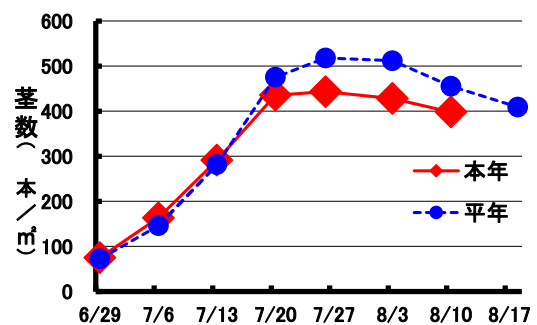


図2. さがびより茎数の推移

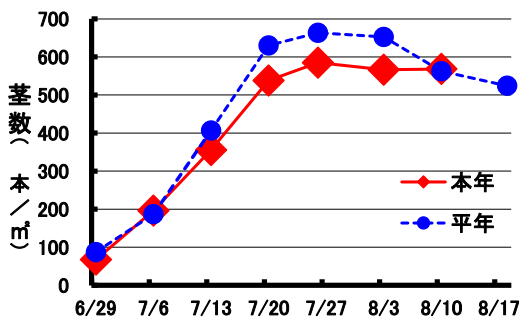



図3. ヒヨクモチ茎数の推移

農試データは佐賀県農業試験研究センターのホームページで技術資料〈米づくり情報〉を確認してください。

佐賀県農業試験研究センター 技術資料 

2. 気象及び普通期水稻の生育概況について（8月11日現在）

（1）気象（8月1日～8月10日までの期間）

- 【平均気温】 平年より 1.5℃高い。
- 【日照時間】 日年比 127%と長い。
- 【降水量】 平年比 139%と多い。

（2）生育概況

6/10 移植の「夢しずく」は出穂期を迎えており、穂数は平年に比べやや少なくなっている。
草丈は「ヒノヒカリ」でやや平年より低く、その他の品種で高くなっている。
茎数は「ヒノヒカリ」、「さがびより」でやや少なく、「ヒヨクモチ」で平年並みに推移し、葉色はいずれの品種もやや淡くなっている。
主幹葉齢の展開は、いずれの品種も、ほぼ平年並みとなっている。

3. 普通期水稻の今後の管理について（8月12日～）

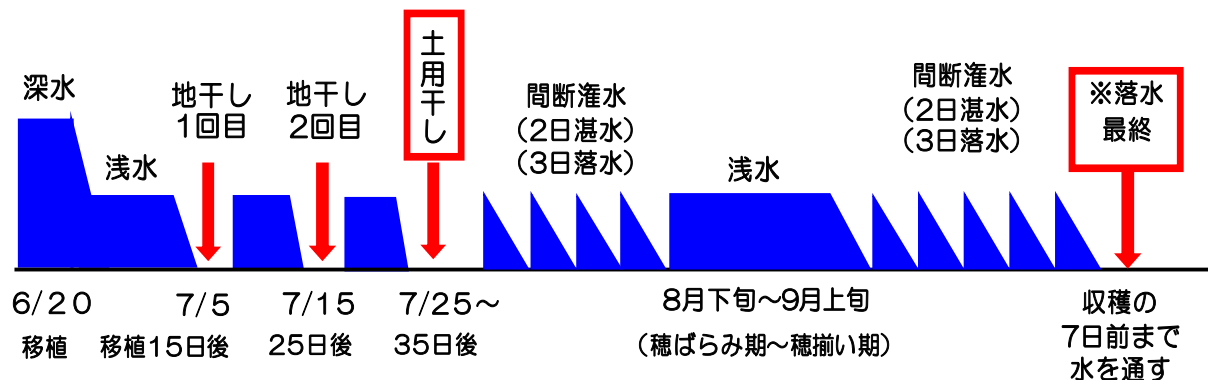
（1）水管理

①「夢しずく」の水管理

- ・現在、生育ステージは出穂期頃です。（6/11 移植は 8/10 出穂期）
- ・穂揃い期まで水の要求度が高いため浅水管理を徹底する。

②「ヒノヒカリ」・「さがびより」・「天使の詩」・「ヒヨクモチ」の水管理

- ・「ヒノヒカリ」は、幼穂形成期～穂ばらみ期、「さがびより」・「天使の詩」では、幼穂形成期を迎えています（幼穂長 3 mm 程度）。
- ・幼穂形成期以降は、水を必要とする時期なので、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。
- ・「ヒヨクモチ」は、間もなく幼穂形成期を迎えるので、湛水管理に移行する。



（2）穂肥

- ・施用時期が遅れないように品種毎の穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長の確認）に基づき、穂肥を施用する。
※隣接圃場が「ヒヨクモチ」だと、「ヒノヒカリ」・「さがびより」・「天使の詩」は葉色が著しく淡く見えるので留意する。

○穂肥の時期や量による収量・品質への影響

- ・早すぎる穂肥 → 止葉が伸び、倒れやすく、籾数が多すぎて登熟が悪くなる
- ・遅すぎる穂肥 → 籾数が少なく、減収し、米の蛋白含量が高く食味が落ちる
- ・多すぎる穂肥 → 倒れやすく、籾数が多く登熟が悪く、蛋白含量が高く食味が落ちる
- ・少なすぎる穂肥 → 籾数が少なく、減収し、米がやせて品質が落ちる

- ・「さがびより」は、6月18～20日頃に移植された圃場で、現在（8/12）穂肥の施用時期を迎えている。良食味米生産のため裏面の穂肥診断基準に基づき施用する。

① 「さがびより」の穂肥判断基準

◎穂肥時期の目安

表1. 出穂前日数と幼穂長の関係

出穂前日数	22 ~ 20	19 ~ 18	18 ~ 16	16 ~ 15
主稈の幼穂長 (mm)	1 ~ 2	3 ~ 5	5 ~ 15	15 ~ 80

★「さがびより」の穂肥施用のポイント

- ①早くても幼穂5mmを確認してから施用する。
- ②出穂前18日（幼穂の長さ10mm）に施用。
- ②草丈が75cm以上で葉色が濃い（SPAD値37以上）場合は施用しない。
- ③草丈が75cm以下で、葉色が薄い（SPAD値33以下）場合は、2日程度早め（出穂前22~20日）に施用。

表2. さがびよりの穂肥診断基準

幼穂1mmの時の草丈	葉色	葉色版群落葉色	SPAD	幼穂長 (mm)	BB602 施用量 (kg/10a)
75cm以下	薄い	2.5以下	33以下	5	15kg
	標準	3.0	33~37	10	12.5kg
	やや濃い	3.5	37~38	15	7.5kg
	濃い	3.8以上	39以上	施用しない	
75~80cm	薄い	3.0以下	36以下	10~15	10kg
	標準~濃い	3.0以上	37以上	施用しない	
80cm以上	施用しない				

※早くても幼穂長が5mmになっていることを確認して穂肥を施用する。

※葉色が濃い圃場や幼穂長が15mm以上になっている圃場は、穂肥は施用しない。

② 「ヒヨクモチ」の穂肥施用の目安

- ・「ヒヨクモチ」では、8月15~16日が1回目の穂肥時期、8月24~26日頃が2回目の穂肥時期になると予測されます。下記の穂肥施用基準を参考に施用して下さい。
- なお、元肥一発肥料を施用した圃場でも、葉色が8月下旬にSPADで38を切った場合は、BB602で、10kg/10aを施用すれば、増収効果があります。

表3. ヒヨクモチの穂肥時期と穂肥量

肥料	穂肥Ⅰ施用量 (kg/10a)	施用時期の目安	穂肥Ⅱ施用量 (kg/10a)	施用時期の目安	実肥施用量 (kg/10a)
LPBB804	40 (平坦:JA さが東部地区)	8月15 ~ 16日頃	なし	—	なし
	35 (山麓:JA さが東部地区)				
	30 (JA 神埼地区)				
BB602	25 (平坦:JA さが東部)	16日頃	10 (JA さが東部)	8月24 ~ 26日 (穂肥Ⅰの10日後)	10 (JA さが東部)
	25 (JA 神埼地区)		15 (JA 神埼地区)		

注1) 大豆跡の圃場では、穂肥の散布を控えるか、上記施用量の5割未満に減肥して施用する。

注2) 実肥を施用する場合は、穂揃期（平年：9月8日~10日頃）に施用する。

(3) 病害虫防除について

① 海外飛来性害虫

- 8月12日現在、ウンカ類（セジロウンカ、トビロウンカ）は、6月25日頃、7月8日頃、7月19日頃に飛来が確認されており、嬉野市のライトトラップでの総捕獲数（6/1～7/20）は、過去10年の中で2番目に多くなっている。
- 一部の圃場ではウンカ類が確認（セジロウンカ主体ではあるが、一部トビロウンカも確認）されている。
- 今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認し、適期防除に努める。

防除適期①
8/7～8/16頃

防除適期②（状況に応じ）
9/1～9/3頃

佐賀県 農業技術防除センター 🔍
※防除適期は「幼虫ふ化揃い期」です。

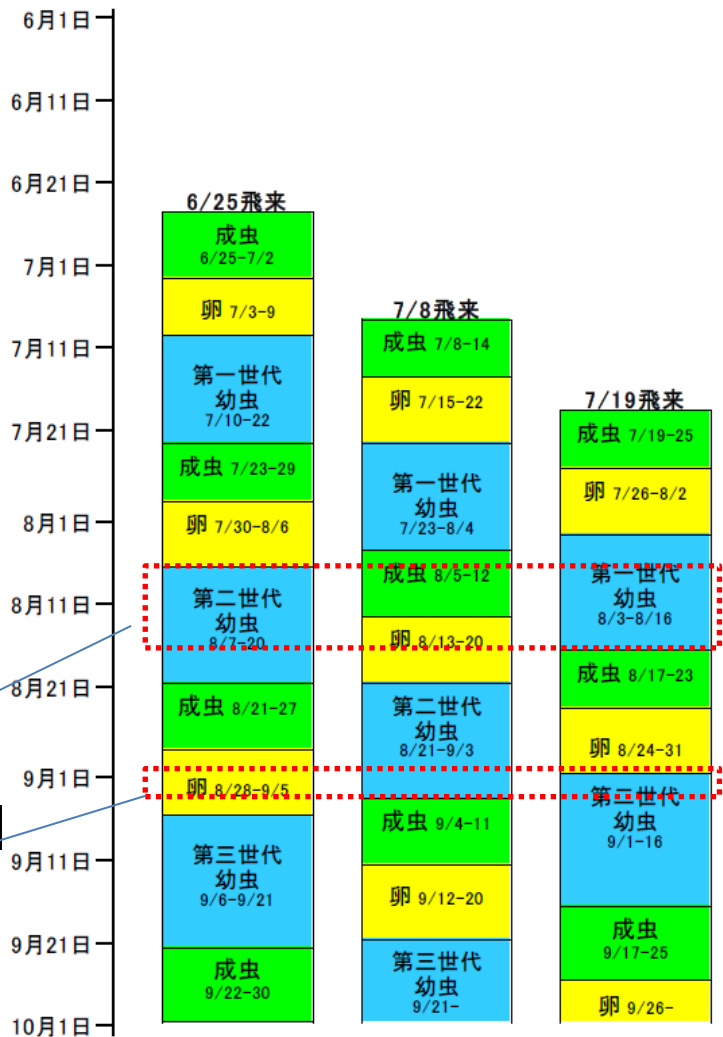


図1 トビロウンカ各世代の発生予測 (第3版, 2022年7月20日作成)

<要防除水準>

8月上旬にトビロウンカの成虫または幼虫が10株あたり2頭確認される場合は幼虫ふ化揃い期に防除しましょう。

② 斑点米カメムシ類について

- 8月の気象予報によると今後も高温が続くと予想されており、カメムシ類の発生量は、平年よりやや多いと予測される。
- 出穂後に畦畔除草をおこなうと水田内に斑点米カメムシ類を誘い込んで被害を助長しますので、出穂10日前までに草刈りを済ませる。

表4. 各品種別の草刈り時期の目安

品種名	出穂期 (平年)	出穂 10 日前
夢しずく	8/12	～8/2頃まで
ヒノヒカリ	8/27	～8/17頃まで
さがびより	9/1	～8/22頃まで
ヒヨクモチ	9/5	～8/27頃まで

※出穂期 (平年) は、三神管内における情報田のデータの平均値

③ いもち病

- 三神管内において、葉いもちの病斑（停止型）を確認している。
- 本田で新たな病斑の発生が認められたら防除を検討する。
- 進展型病斑が見られる圃場では、早急に防除を実施し穂いもちの防除を必ず実施する。
- 補植用の苗を圃場に放置すると、いもち病の温床となるので早急に撤去する。



いもち病の病斑（停止型）

④ 紋枯れ病

- 一部の圃場で紋枯れ病の発生を確認している。
- 高温多湿条件が続くと、紋枯れ病が発生する恐れが高まるので注意する。
- 病斑が確認される場合は、病斑が上位葉の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を行う。（液剤・粉剤の場合は、出穂の10～20日間を目安）



紋枯れ病の病斑 (8/10 撮影: ヒヨクモチ)

4. 大豆の今後の管理について

1) 大豆の生育状況

播種期が6月下旬～7月下旬にかけて幅広い
ため、播種期により圃場間で生育格差が見られる。
大豆の生育ステージは、6月下旬頃播種が本葉10～12葉程度、7月上旬頃播種が本葉8～10葉程度、7月中旬頃播種が本葉5～6葉程度となっている。

6月下旬播種では開花始めとなっている。

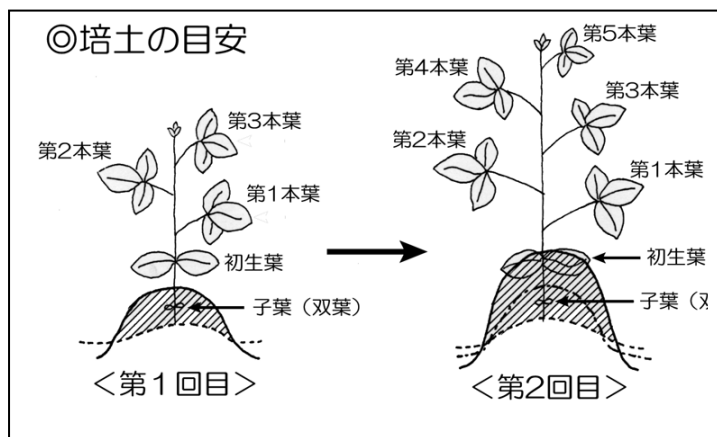


開花の状況 (8/12 撮影: 6/30 播種圃場)

2) 今後の管理

○中耕・培土の実施

- 7月中旬播種 : 2回目の培土時期頃です。本葉が5枚開いたのを確認したら、初生葉（子葉の上の葉）が隠れる程度まで行ってください。
- 7月下旬播種 : 1回目の培土時期頃です。本葉が3枚開いているのを確認したら、子葉が隠れる程度まで1回目の培土を行ってください。



※特に、降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行いましょう。

3) 除草剤について

○生育期処理

- ・雑草の発生が多い圃場では、中耕培土を実施し雑草の発生に応じて生育期の茎葉処理剤（イネ科：ポルトフロアブル、広葉：アタックショット乳剤等）を散布してください。
- ・アサガオ類・ホオズキ類の難防除雑草が多い地域では、圃場内侵入防止に努めましょう。また圃場内に発生している場合は、発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット散布や手取りによる徹底防除を行ってください。

4) 病害虫防除（ハスモンヨトウ、カメムシ類）

- ・夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されますので、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意しましょう。
- ・農業技術防除センターの病害虫発生予察情報（8/10:第5号）によると、本年はハスモンヨトウの発生が、平年より「やや多」、カメムシ類の発生が「多」と予測されています。

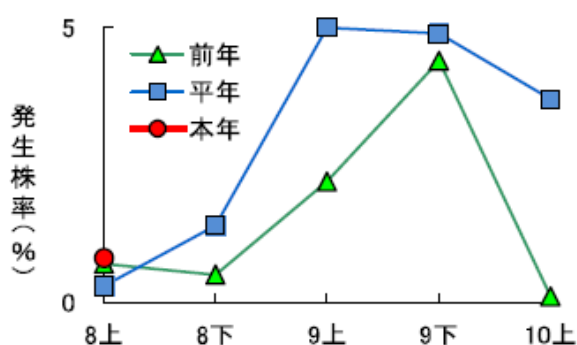


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

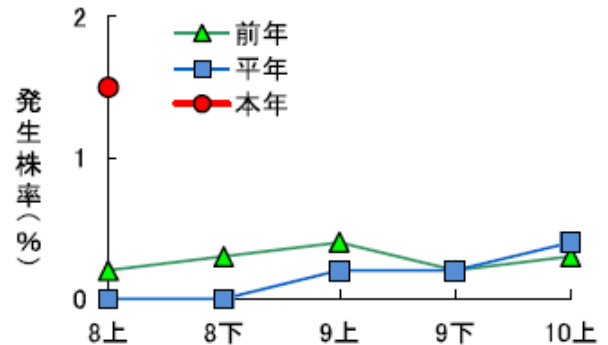


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

図.ハスモンヨトウ、カメムシの発生推移（農業技術防除センター病害虫発生予察情報第5号掲載資料）

- ・播種期が早い圃場では、例年8月中旬頃からハスモンヨトウの幼虫が散見され始めます。
- ・ハスモンヨトウの防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中令幼虫以上（体長約2 cm以上）になると、防除効果が低下します。
- ・防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要です。
- ・カメムシ類の防除適期は、莢の伸長初期から子実肥大中期ですので、圃場での発生状況を確認し、遅れないように防除を実施しましょう。



ハスモンヨトウ (①若齢幼虫の集団, ②白変葉〈若齢幼虫の集団による食害〉, ③中-老齢幼虫)
(平成22年撮影)

圃場毎に発生状況を確認し、適期防除を実施してください

